

〔書評〕

陳 力衛著

『和製漢語の形成とその展開』

田 島 優

はじめに

本書は、和製漢語をタイトルに冠した記念すべき研究書である。和製漢語は漢語研究において取りあげられることは多いが、本書のように和製漢語を中心にまた歴史的に論じることにはなかった。漢語研究は、池上（1978a）が「他の領域に比べて進展が遅い」と述べていたのが隔世の感のごとく、近年では国語史関係の書籍の中で漢語関係の刊行が目立っている。気がついたものを列挙すれば、柏谷嘉弘『続日本漢語の系譜』（1997）、佐藤喜代治『漢語漢字の研究』（1998）、浅野敏彦『国語史のなかの漢語』（1998）、田島優『近代漢字表記語の研究』（1998）などがある（本書序章第一節「和製漢語研究の現状」に詳細な研究史が述べられている）。これらいずれの書も、漢語について歴史的な面から考察し、多くの漢語を扱う中で和製漢語についても触れている。このように、和製漢語は漢語研究において重要な課題なのである。

和製漢語の研究を困難にしているのは和製かどうかの判断である。我々研究者は、中国の用例について『大漢和辞典』を安易に判断材料とし、幕末・明治初期の訳語に関しても適応しがちである。しかし、『大漢和辞典』には漢訳洋書の例はあがっていない。近年、英華辞書や中国洋学書の研究が行われ、沈国威『近代日中語彙交流史——新漢語の生成と受容——』（1994）や荒川清秀『近代日中学術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に——』（1997）に代表される、中国における日本製漢語の洗い直しが盛んに行われている。本書でも、上代から現代までの和製漢語史の流れとして、この問題についても中国洋学書輸入の問題から踏み込んでいる。

これからの論述において、陳氏を著者、田島を評者として進めていく。本書の構成は次のようになっている。

序章 和製漢語の概念とその問題点

第一節 和製漢語研究の現状 第二節 和製漢語の範囲と分類

第一章 和製漢語発生の素地

第一節 訓読みから音読みへ 第二節 漢字字義の日本的变化 第三節 和訓の発達にみる漢字の役割

第二章 音韻変化による表記の変容

第一節 同音や類音による異表記の産出 第二節 「文盲」考——「蚊虻」との関係を
中心に—— 第三節 「化粧」考——意味と表記の変遷—— 第四節 「蜚蜮」考
——忌み意識による書き分け——

第三章 語構成による和製漢語の産出

第一節 語構成から見る和製漢語の特質 第二節 副詞による連用修飾の語構成
第三節 語構成と出典とのかかわり 第四節 現代語における連用修飾の語構成

第四章 近代における和製漢語の生成

第一節 新漢語の構成 第二節 明治初期における漢訳洋書の受容 第三節
『哲学字彙』における訳語の成立 第四節 近代国語辞典における字音語の
扱い

第五章 現代中国語における和製漢語の受容

第一節 日中同形語の視点 第二節 和製漢語の受容における漢語類義語の形成
終章 和製漢語の行方

「既発表の旧稿との関係」によると、多くの節が本書のための書き下ろしになっている。特に第五章・終章はすべて書き下ろしである。本書を読み、著者がこのような問題にまで研究の手を広げていたことを初めて知った分野も多い。早い段階で、一冊の本としての全体像が見えてきたのであろう。全体としてまとまりのあるものとなっている。

序章では和製漢語の定義を行い、第一章・第二章においては古代から近代にかけての和製漢語の産出過程について、第三章では和製漢語の語構成における特徴について、第四章では近代の訳語に見られる和製漢語について、第五章では和製漢語の中国における受容、終章では将来について述べている。和製漢語についての通時的な研究である。著者が「産出」と「生成」と表現を変えていることからわかるように、序章・終章を除いて、第一章から第三章までと、第四章第五章との二部構成になっている。第三章までは和製漢語の造語法について、第四章・第五章は近代における中国語訳語の受容並びに中国語への移入について扱っている。なお、著者による各章の概要は p 44 に述べられており、著者がどのように本書を構成したのかわかりやすい。

先に述べてしまうが、著者の研究の特徴は、和製漢語を和文構造による造語という観点から考察していることである。第一章に詳細に述べられているが、和製漢語の多くが和訓に基づく語構成意識によっている。そのために、第三章で扱われているように、漢語構造にない、あるいは漢語構造として成り立ちにくい語が生じてくる。すなわち、語構成がどのようになっているのかによって和製かどうかの判断がつくと指摘する。和文構造による造語法については、森岡（1969）が明治初期の訳語における和製漢語生産の一特徴としてあげており、古代から現代まで変わっていない和製漢語産出方法といえよう。語構成から和製かどうか判断できるという指摘は、中国語の知識のない評者には欠けていた視点である。荒川（2000）の同義あるいは類義の漢字結合において声調に規則

があるという指摘と同じく、大変興味深いものであり、評者の漢語研究の限界を感じさせるものであった。

1 漢語の定義、和習と和製漢語（序章について）

序章の第一節は評者にはわかりにくい箇所であった。著者は、第二節において和製漢語の概念を明らかにする手だてとして、この第一節で「日本漢語」を設定し、その下位に字音語と字訓語を置いている。漢語の中に字訓語を含めたのは、「熟字訓の漢字表記（外来語の漢字表記を含めて）や湯桶読み・重箱読みの語や、さらに訓読みの語の中にも形態的・意味的に中国由来のものが多く、歴史的に見れば日本語の中で読みが変化しただけのことだから、形態や意味から見てこれらも漢語であることは変わりがないはずだ。（p 4）」とする。これは漢語が字音・形態・意味の三要素からなっているのに、現在漢語の認定において音読みという字音に重点が置かれていることに対する批判である。しかし、字音は漢語の構成要素であるから、それは必要条件である。著者は訓読みや熟字訓や湯桶読み・重箱読みを、漢語に見られる意味変化や形態変化と同様に、字音の変化（「一種の音韻上の変化」p 36）として処理しようとしている。著者は字音基準を批判しているが、これは逆に形態を重視するあまりに字音の幅を広げすぎているのではないと思われる。中国語に使用されている漢字列が日本のある時代の文献に見られる場合、音読語（漢語）か訓読語（和語）かわからない場合が多い。そのような場合その漢字列を漢語（日本漢語）として見なすことは許されるかもしれない。しかし、その漢字列を著者が字訓語としている「熟字訓」（紫陽花、珈琲）、「湯桶読み・重箱読み」（身分、場所、手本）、「訓読み」（手続）のように既に音読語ではないことがわかっているものまでも漢語に含めて考えることには抵抗を感じる。字訓語という名称に特に違和感を抱くのである。著者の意図はよくわかるのであるが、第二節のように単にその形態が漢籍にあるかどうかによって重点を置いた分類法でよいのではないか。ただ、そうすると和製漢語の置き所に困るという問題は生じてくる。評者などは、語種の分類の一項目として漢語をたて、和語や外来語や混種語と対立するものとして考えている。元々和語であったものでも漢字の字音で表記されるようになったものを漢語（和製漢語）とする。漢語であっても和語であっても漢字で表記されることが一般的な語を漢字表記語として、語種とは異なる別の分類のものと考えている。著者は、第二節で「いわゆる訓読みから音読みへと変わった狭義的な「和製漢語」の位置づけは、（中略）、漢語の下位にあるのではなく、むしろ漢語と和語の間に位置するものである。（pp. 32～33）」と述べているが、漢語をどのような目的で立てているのであろうか。

この第一節で特に難解に感じられたのは、「二 和習の発生」における「和習」と「和製漢語」の違いについて論じた箇所である。和習については「和習の発生は（中略）、語の単位ではなく、文の単位にある助辞や語順の使い方によって由来している。（p 7）」

と発生について論じ、そして結論部分で「和習と和製を一体どう区別するかを考えなければならないが、根本的な違いは、前者は文のレベルにあり、後者は語のレベルにあると考えられる。(p 9)」としている。それにもかかわらず、和製漢語との区別を明確にするために「ここでは文中の修辭的な和習について、考慮せず、語のレベルでの和習を中心に取り上げたい。(p 7)」とする方法論は、なかなか理解しがたいのである。「文面上における和習と、語のレベルにおける和製とに大きく分けられるが、実際のところ、語のレベルでの和習も認められ (p 10)」とする結論からは、評者には著者が批判している小島憲之の「漢語らしい和製漢語は、和習語に過ぎない」という考え方、すなわち和製漢語を和習語の一つとする考え方で十分ではなからうか。第二節に「和習の段階」「和製の段階」といった表現が見られるが、評者には理解できていない。「三「変容漢語」の扱い」においては、主に日本語において形態や意味が変化した漢語について、形態が変化したものについては和製漢語と見なすが、意味変化したものについては和製漢語として扱わない立場をとる。意味変化した語を和製漢語とする立場の研究も見られるが、著者は意味変化した多くの語を扱い、日本語の中で徐々に起きた意味変化は受容に伴うものとして和製漢語として扱わないとする。この姿勢は評者も同じである。「四 漢語研究史における和製漢語の視点」においては、和製漢語の立場から漢語研究史がまとめられている。先行研究に目が行き届いており、有益である。

第二節「和製漢語の範囲と分類」は、著者の考えに基づく和製漢語の分類が示されている箇所である。ここで著者の和製漢語の範囲が明確にされる。第一節で規定した日本漢語を、「漢籍に出典のある・なし」に分類する (p 35)。「漢籍に出典のない語」は和製漢語とし、「訓から音へ」「訳語」「和文構造」「軸字の和化」「省略」「当て字」「漢文構造」「接辞による派生」といった造語パターンから分類を行っている。一方「漢籍に出典のある語」については、和製漢語の範囲を設定するためにまず「形態変化ある・なし」で分類し、次に「意味変化ある・なし」に分類する。更にそこに含まれる語を特徴別によって分類項をたてている。この「漢籍に出典のある語」に関しては、「形態変化ある」の語は第一節で規定したようにすべて和製漢語とする。「形態変化なし」の語では「意味変化なし」は漢語とする。意味変化については第一節で和製漢語の基準としなかったが、「意味変化あり」の中でも中国語とは語構成の異なっている「激動」「具申」「洋行」などは和製漢語とするように、変化の原因が中国語と語構成の違いによるものは和製漢語とする。このような語構成への視点は、漢字列が漢籍にあるか否かに重点をおいていたこれまでの研究において欠けていた部分であり、重要な指摘である。著者は語構成の変化は和訓の影響によるものとする。この節では、細かいことであるが、評者の関心から次の記述が気になった。「ただ、日本人による熟字訓（「莫大小」「素人」など）は「漢籍に出典なし」の「当て字」に入れて扱いたい。(p 36)」。著者の立場から、その漢字列が漢籍にあるかないかによって「熟字訓」と「当て字」に分けようとしてい

るが、現在のところ「熟字訓」と「当て字」の用語の使い方が明確になっていない。田島(1998, 2002)で述べたが、「熟字訓」と「当て字」とは表裏の関係であり、熟字訓は読解的な立場、「当て字」は表記的な立場の名称である。「熟字訓」と「当て字」について、これらの用語が明確になることを望む。

2 和訓による和製漢語の産出(第一章について)

本章は著者の和製漢語産出の根本原理とするところである。第一節「訓読みから音読みへ」では著者の和製漢語の分類でいうと「訓から音へ」、第二節「漢字字義の日本の変化」と第三節「和訓の発達にみる漢字の役割」とでは「軸字の和化」を扱っている。第一節においては訓読み語の音読みによる凝縮化の効用について説明されており、要約すると次のようになる。音読みは粘着剤の役割を果たし、個々の字訓を一語にする。漢字音という音声上の理由から字と字が分けられなくなり一語としての結合度も高くなり、文法の枠組みの中にも組み入れられやすく、そのために意味変化も起こしやすくなる。この節では更に文のレベルから、句のレベルから、語のレベルからの和製漢語化の例について説明している。第二節では、漢字が日本語化したことにより中国語の意味には見られない日本語の意味を帯び、それが軸字となって次から次へと熟字(=和製漢語)を生み出したことを明らかにして、「淋」「済」「仮」「配」を例に日本的意味の発生過程並びに軸字の役割について詳細に考察している。和製漢語の産出の背景に和訓の影響があることはこれまでもよく論じられ、また個別的に考察されてはいる。しかし本書のように、単なる和訓による影響だけでなく、日本語の意味による和訓の発生に伴う和製漢語群産出について論じることができるのは、中国語には存在しない漢字の意味への気づき、並びに漢語を語構成によって分析しようとする姿勢だからであろう。

3 同音異表記(第二章について)

第二章「音韻変化による表記の変容」では、第一節で概説的なことが述べられ、第二節から第四節では個別例として「文盲」「化粧」「棗龜」について詳細に論じられている。この章の扱うところは評者の関心のあるテーマである。まずこの章の題目を「音韻変化」としてあるのが気になった。第一節「同音や類音による異表記の産出」で述べられているように、異表記が生まれる背景にあるのは意味の変化である。意味が変化したことによってその意味に合うような同音の漢字表記へと変容させるのが一般的である。音の変化としてあげてあるのは第三節の「化粧」、開合の統合というような日本語の音韻変化によるものは「重宝・調法」ぐらいであろうか。これらの場合においても意味の変化は指摘されている。なぜこのようにしたのか甚だ疑問である。先に、意味の変化が異表記を生み出す要因であると述べたが、著者は「本来ただ簡単に書いたために生まれた表記が定着し、その表記語が字面通りに意味変化していく場合がある。(p114)」とし

て「蚊虻→文盲、不憫→不便、経記→景気」をあげている。例としてこれらが適切かどうか。「景気」の語源説として「経記」をあげているのは山田(1940)ぐらいである。また「不憫→不便」の研究として田島(1989)があげられているが、これは「不便→不憫」の誤りであり、ただ簡単に書いただけではなく、意味も前とは変わっていない。詳しくは注に譲る。「蚊虻→文盲」については第二節「『文盲』考」で詳細に扱われている。「文盲」について先行研究としてあげられていないが、池上(1978b)がある。池上は「蚊虻」と「文盲」の先後関係について3つの可能性をあげてはいるが結論は保留している。著者は「文盲」は「蚊虻」の借字として生まれ「蚊虻」の意味で使われていた。それが、中世後期から「文に盲(くらい)」の解釈が強くなり「蚊虻」の意味が薄れたとする。著者は平安末から鎌倉期の「文盲」を「蚊虻」の意味で解釈できるとしているが、評者には多義的に解釈しすぎているように思える。語誌について「立証するのは並大抵のことではない。(p133)」と記しているが、納得させることも並大抵の事ではないことを語誌を追究する者として実感した。

4 語構成としての連用修飾の日本の特異性(第三章について)

第三章は評者の大変興味を持った部分である。語構成は和製漢語研究に欠けていた視点である。漢語について扱われることはあったが、和製漢語を語構成から見ようとはしなかった。それは「はじめに」で述べたように、和製漢語は個別的に扱われるだけで、著者のように和製漢語を総体的にまた体系的に分析しようとしなかったことによる。第一節「語構成から見る和製漢語の特質」において、『論語』に関する日本(柏谷嘉弘)と中国(程湘清)による語彙調査結果が示されている。中国では一字語が74.9%を占めるのに対し、日本では二字語が54.8%である。日本で二字漢語が多いのは、中国語では語として認定しがたい、副詞が動詞を修飾する連用修飾による語構成の語が多いことが原因であるという。それは、中国語では副詞の多くが虚詞に含まれ一語のレベルには発展しにくく、中国で文単位でとるものを、日本では語のレベルで考えていることによる。この副詞による連用修飾の語構成が和製漢語かどうかの大きな判断材料となる。先に述べたが、序章第二節で和製漢語の範囲として、「漢籍に出典のある語」で「形態変化なし」の場合は和製漢語として扱わないが、「意味変化のある」の中で特別に「激動、具申、洋行、失火、安置」の類を和製漢語としている。これは中国語との語構成の違いによるものである。このような語構成の違いが生じたのは、連用修飾の語構成が日本では一般的であり、そのように解釈しようとしたことによる。その背景には、和訓による解釈があったからとする。確かに『塵袋』などを読んでみると、漢語の一字一字を常用訓で解釈していくために、意味が合わずに慌てている。このような訓の力が語構成を変え意味を変えていくことが個別例をあげて説明されている。

5 新漢語と和製漢語意識（第四章について）

近代になって新しく使用されるようになった新漢語は、幕末・明治初期の漢語流行の時代の主要なテーマとなっている。古くは森岡（1969）が訳語へのロブシャイドの『英華字典』の影響を指摘したが、近年になって英華辞典の研究並びに中国洋学書の研究が盛んになってきた。和製漢語と思われていた学術用語が実際には中国洋学書に見られることが明らかになり、先後関係が問題となったりする。著者は第一節「新漢語の構成」において、訳語は「漢訳洋書→英華字典→英和辞典→英華辞典（p270）」のサークルをなし、英華字典と英華辞典との間に日本による加工並びに訳語として定着の過程が入っているという。そして、中国への逆輸入に「英和辞典」の影響の貢献を明らかにしている。また、「漢文に出典があっても、それを英訳にあてたのが日本人の文章が最初であれば、それを日本語における訳語の成立とすることができる。（p277）」という立場をとっている。第二節以降は著者による幅広い文献調査に基づいている。訳語における漢訳洋書の影響等について述べられはするが、ある書物がどのようなルートで流入しどのように利用されたかについて明らかにすることはなかなか困難である。第二節「明治初期における漢訳洋書の受容」では、中国の理工系啓蒙書翻訳に携わった徐余の伝記にある、上海の翻訳館で日本政府が派遣した柳原前光が翻訳書を一括購入したという記事をもとに追跡が始まる。『大日本外交文書』によって購入時期・購入書を明らかにして、所蔵状況や、写本や訓点本、翻訳、抄訳本などへの利用状況から、漢訳洋書の訳語への影響を明らかにしている。次から次へと謎を解き明かしていく過程はドキュメントとして胸躍るものを感じる。英華字典の国内の所蔵については飛田・宮田（1997）の労作がある。それらについても、本書のように所蔵印などによってどのようなところで活用されたか知ること可能な場合もあろう。第三節「『哲学字彙』における訳語の成立」は、都立中央図書館の所蔵の井上哲次郎自身による第二版書き入れ本と第三版書き入れ本の調査によっている。それぞれの書き入れ本から第二版に書かれた増補内容、第三版に書かれた増補内容を明らかにしている。出典明記について、訳語創出の方法であるとの今までの評価に対し、「むしろ訳語が先に成立し、その後出典をどんどん付け加えたものであること（p321）」から、「確たる証拠」による正当性並びに「博学」ぶりを示すものとする。第四節「近代国語辞書における字音語の扱い方」では、『言海』と『日本大辞書』に見られる和製漢語を類別する意識を扱っている。評者も近代における意味の派生を知る手がかりとして、『日本大辞書』における多義語における「字音」表示を参考にした。このような和製漢語についての意識は、著者もあげているが漢語辞書の『必携熟字集』（明治12年）の俗語表示にも見られる。他にも『和英語林集成3版』（明治19年）の（coll.）表示、『漢英対照いろは辞典』（明治21年）の〔俗〕表示もそれに通じるものと評者は考えている。明治20年当時においては和製漢語を意識する時代であったので

あろう。著者の調査によると、漢籍に出典があるものでも、昔から使われてきて、もうすっかり日本語として定着しているものは和製漢語として扱われることがあったようである。

6 現代中国語における和製漢語の受容（第五章について）

近年同形語の研究をよく見かけるが、安易な研究が多いようである。そこで、著者は第一節「日中同形語の視点」において同形語研究の問題点を整理している。意味に関しては共時的な視点にのみ依拠しては限界があり、意味の相違については史的な視点からの考察の必要性を主張する（p 363）。和製漢語の場合、連体修飾には使えるが、連用修飾と述語になれないという不完全な性格を持っているという。これによっても、逆輸入された語との判断が可能である。このような構文的なアプローチも有効なようであり、今後の研究課題を示している。第二節「和製漢語の受容による漢語類義語の形成」は、類義の発生の原因として、日本では英華字典の訳語の影響、中国では英和辞典の影響によるものであることを明らかにしている。第四章第一節でも述べているが、著者は中国と日本との間に見られる辞書のサークルの重要性を示している。

おわりに

本書はこれまで個別的に扱われてきた和製漢語を総体的にまた体系的に扱ったものである。このような視点によって、いままで気がつかなかった和製漢語の特徴が明らかになってきた。筆者の上代語から現代語までの日本語史研究の幅広い知識と文法研究への関心、そして漢籍を駆使した研究方法はなかなかのまねのできるころではない。本稿では評者の気になった箇所についての言及が多くなったが、本書の至るところに今後の研究課題が示されている。これから和製漢語の研究を志す人にとっての基本文献となろう。終章において、著者は「これからの仕事としてはそれ（野村雅昭の「基本三千漢語一覧」）をベースに和製漢語の辞書作りに取り組んでいきたいと思う。（p 401）」と述べている。著者のパワーと知識をもってすればその完成は間近であろう。なお、本書は現在品切れであると聞く。増刷を望む。その際には、誤植などの箇所の訂正をお願いしたい。

注 かわいそだの意のフビンの漢字表記「不便」と新しく使われるようになった都合が悪い意のフビンの漢字表記「不便」とが同表記になり衝突をおこしたために、かわいそだのフビンが「不憫」という意味的には全く逆となる表記を生成し使用するようになったのである。詳細については田島（1989）を参照されたい。なお、評者の論文からの例として気になった箇所があったのでついでにここに記しておく。p 111 に評者の研究が紹介されており、音韻変化による漢字表記の書き換えの例として、「障礙→障碍」と「氣象→気性」があがっている

が、音の問題としては「障礙→障碍」は「障礙・障碍→障害」を評者は意図としており、また「氣象→気性」をなぜこの例としてあげたのか疑問である。

参考文献

- 荒川清秀 (2000) 「「健康」の語源をめぐって」『文学・語学』166号
- 池上禎造 (1978 a) 「漢語研究の課題」『南山国文論集』3号、池上 (1984) 所収。
- (1978 b) 「識字層の問題」『岩波講座日本語 別巻』岩波書店、池上 (1984) 所収。
- (1984) 『漢語研究の構想』岩波書店
- 田島 優 (1989) 「不便考——同表記衝突——」『愛知県立大学文学部論集 (国文学科編)』37号 改稿して田島 (1998) に所収。
- (1998) 『近代漢字表記語の研究』和泉書院
- (2002) 「振り仮名と漢字表記との関係の処理について」『日本語の文字・表記』国立国語研究所
- 飛田良文・宮田和子 (1997) 「十九世紀の英華・華英辭典目録」『国語論究 六』明治書院
- 森岡健二 (1969) 『近代語の成立——明治期語彙編——』明治書院
- 山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館出版
- (2001年2月28日発行 汲古書院刊 A5判 448ページ+索引18ページ 本体価格12,000円)

——宮城学院女子大学教授——

(2002年9月27日 受理)